

転機

総合政策学部 准教授 齊藤邦史さいとうくにひみ

法学の片端をかじり始めたのは、義塾の総合政策学部を卒業してから3年を過ぎた、20代半ばのころだった。

当時は、新卒で就職した民間企業で、金融系のシステム開発プロジェクトに従事していた。それなりに安定した生活ではあったものの、読書に費やす時間は少なくなり、学生時代が懐かしく感じられた。そんなある日、勤務先の福利厚生一覧のなかに、夜間大学院への通学補助制度があることに気がついた。何か縁を感じて、夜間開講の修士課程への進学を考えるようになった。

せっかくなので、学部では勉強しなかったこと、教わらなければわかりそうにないことに取り組むことにした。そのころ、コンピュータ・ソフトウェアの知的財産権が注目を集めており、その研究なら勤務先の決裁も得られるのではないかと考えた。そして、筑波大学の大家キャンパス（現・東京キャンパス／文京区）にある企業法学専攻は、知的財産法の科目が多数設置されており、学部で法律学を専攻していない社会人も受け入れていることがわかった。

こうして、社会人大学院生としての生活が始まった。当時の大家キャンパスの建物は古かったが、少人数の演習や講義を満喫した。なにより、会社員としての生活時間を相対化する拠点を得られたような気がして、ある種の開放感をおぼえていた。慣れない研究ではいろいろと恥ずかしい思いもしたけれども、あつという間に2年間に過ぎた。

人生の転機は、さまざまな偶然が重なって訪れる。こうして出会った法律学の勉強をその後も続けて、かれこれ20年近くの歳月が経過した。このところ感染症対策のためキャンパスの教壇に立つことのできない日々が続いているが、この瞬間もわれわれは、オンライン授業の画面越しで学生の転機に立ち会っているのかもしれない。初心を忘れることなく、真摯に向かい合っていきたい。



修士課程の入学試験対策で購入した放送大学教材の『法学入門』

談話室

教員によるエッセイコーナー